イギリス科ニューズレター

September 2018

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

(8 号館 402 号室)TEL/FAX 03-5454-6304（直通）

Email: british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp
Web: http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp

主任挨拶

小川浩之

2018 年 4 月から教養学部後期課程地域文化研究分科イギリス研究コースの主任を務めております小川浩之と申します。どうぞよろしくお願い致します。

私が駒場に着任した 2010 年 10 月から約 8 年が経ちました。その間にイギリスで起こった最も重要な出来事のひとつに、16 年 6 月の国民投票で EU 離脱派が勝利したことがあります。もちろん、私がこの原稿を書いている 18 年 7 月時点では、イギリスはまだ EU 加盟国であり、EU 離脱（ブレグジット）および離脱後のイギリスと EU の関係がどのようなものになるのかは、依然として明らかになっていません。極端な場合、結局イギリスは EU から離脱しなかったということさえ起こるかもしれません。

2016 年 6 月の国民投票の結果は多くの人を驚かせたと言われます。しかし、私は特には驚きませんでした。というのも、私は、国民投票前に何度も行われた世論調査の結果を見て、離脱派の勝利という事態は十分に起こりうると強く懸念していたからです。そうした状態で国民投票の日を迎えましたので、BBC の開票速報を見ながら、もはや残留派の勝利は難しいと思わざるをえない票差がついたときには、ただ深く落胆しました。私の落胆は、その後も続いています。

その理由は、いくつかに整理できます。第一に、EU から離脱すれば、イギリスの政治家や官僚は、欧州理事会をはじめとする様々な EU の会議に出席できなくなります。イギリスは、ヨーロッパの主要な議題が話し合われ、重要な決定が行われる場に加わる権利を、自ら放棄しようとしています。もはや適切な情報を得ることさえ困難になるかもしれません。第二に、近年ではイギリスの貿易の約半分が EU 諸国との間で行われている中で、イギリスが EU から離脱すれば、そうした経済関係が（程度の差はあれ）制約を受けることは避けられません。EU 離脱後、イギリスは EU 域外の国々と新たに貿易協定を結ぼうとするはずですが、イギリスの経済力や市場規模は、イギリスを除く EU 27 カ国と比べてはるかに小さいため、域外諸国に対して十分な交渉力を持つことは、多くの場合困難だと考えられます。第三に、以上のような不利益を緩和しようとすれば、EU 離脱後も、EU との間で何らかの緊密な関係を築くことが求められます。しかし、EU と緊密な関係を結ぼうとする際には、EU の制度自体が複雑な交渉と妥協の結果作られてきたものであるため変更が容易ではないことと EU とイギリスの大きな力の差ゆえに、イギリスに有利に交渉が進められる見込みはあまり高くないように思われます。実際の交渉の余地は小さく、EU 側が定めたルールの大半を受け入れざるをえないことになりかねません。そうなれば、EU 離脱派が離脱によって獲得しようとした「独立」の価値は大きく損なわれるでしょう（そして、EU を離脱しても結局は EU のルールに拘束されるのであれば、不満はあっても EU の中に残り、そこでルールの形成に関与した方がまだよかったということにはならないでしょうか）。もちろん、そうした状況を嫌って、EU から大きく距離をとる「強硬離脱」を選ぶことは可能です。しかし、それはイギリスにとって、政治、経済の両面で相当大きな不利益をともないかねないものです。

私が悲観的すぎるのかもしれません。「ブレグジット」の着地点がもっとよい形になることもありえるでしょう。もしそうなれば、私自身は研究者としての自らの考えが未熟であったと反省を強いられますが、イギリスと EU の双方にとって、その方がはるかによいと思います。来年度のニューズレターでは、今よりもよい見通しを述べることができるように願いつつ、筆を置くことにします。

「イギリス留学体験記」

修士課程　照井敬生（63 回）

こんにちは。2016 年 10 月から 2017 年 9 月にかけてウォリック大学の大学院修士課程に在籍していました。

1. 留学について

私が進学したウォリック大学は東京大学とも交換留学の協定を結んでおり、学部生でウォリックに交換留学をする方も多々みられます。私自身は、一年のコースワークと修士論文執筆からなる正規課程に進学し、修士号 (MA with Distinction: International Cultural Policy and Management) を授与される形で留学を行いました。

交換留学と正規進学を比較して、後者のメリットとしては、コースワーク、研究指導、同級生との密な結びつきなど、大学院のフルメンバーとしての恩恵が受けられる点です。これに対してデメリットは、学費が非常に嵩むことと交換留学生に比べて事務の対応が手薄になる点です。

2. 大学の概要

ウォリック大学は 1961 年設立の新設校で、先駆的な大学運営を評価されています。私が在籍した一年の間にも、図書館の 24 時間営業、大学購買部でのセルフレジの導入や学生寮の増築など、大学設備と研究環境への投資が盛んに行われているのが印象的でした。

新興大学としてのウォリックの意欲的な取り組みは、研究機関の構成にも見て取れます。私がウォリックへの進学を決断した決め手は、同大学が文化政策を専門とする研究センター (Centre for Cultural and Media Policy Studies) を擁していたことでした。新たな研究領域に焦点を当てた研究機関や研究共同体が形成されている点は同校の極めて大きな魅力だと思います。

3. 学業について

私が進学したコースは、文化政策研究センターの中でも文化政策に特化したものでした。コースワークでは、毎週 2－10 本ほどの課題文献を予習したうえで、レクチャーと討論に参加し、学期末に課題エッセイを提出することとなります。自律的に研究を進めるイギリスの博士課程とは毛色が異なる、アメリカの大学院に近い構成でした。

個人的に今回の留学で最も刺激的だったのがこのコースワークの内容でした。一学期目には、ブリュデュー社会学を専門とする David Wright 教授による、芸術文化の思想史を扱ったゼミと、公共政策学を専門とする Clive Gray 教授による、政治学・政策学の理論とその文化政策への応用に関するゼミの二つを履修します。人文学と社会科学の横断領域として積み上げられてきた文化政策研究のディシプリンを身に付けるうえで、このコースワークは非常に貴重な経験でした。一学期目の内容を踏まえ、二学期目は個々人の関心に則して自由選択の授業を取ることになります。私は博物館研究・グローバルオーディエンス研究・宗教政策研究のコースを履修しましたが、いずれも特色がある興味深いゼミでした。

クラスメイトに目を向けると、私が所属する国際文化政策コースには全体で 25 人前後の学生がいたのですが、日本人は私一人で、中国・韓国からそれぞれ数人、残りは大陸ヨーロッパ・英語圏の諸国から留学してきており、非常に多様性に富んだ環境でした。プログラム全体が適度な規模であったことから、クラスメイトと授業後にパブで歓談し、週末には小旅行に行くなど親密な繋がりが出来る環境でした。同時に、どの学生も自国の文化産業・文化政策への知識と問題意識を持ちこんで留学をしており、彼らとの日々の議論からは多くを学びました。余談ですが、クラスメイトとの仲を深めるきっかけが、学内で定期的に上映される新作映画鑑賞会を作ったことでした。この経緯から私が研究している映画は、国境を越えて友好関係を結ぶ契機となりうるのだと身を以て知ることが出来ました。

4. 大学外の活動

ウォリック大学内での活動に加えて、学外でも研究に関連した経験を積む機会に恵まれました。コースワークの合間を縫って、北欧文化政策学会や国際公共政策学会で研究報告を行ったことは、自分の研究を見直すうえで有益な経験でした。ヨーロッパで形成されている文化政策研究者の共同体・ネットワークの活気を体感できたことも、大いに刺激になりました（帰国後、そうしたネットワークが、カナダやオーストラリア、シンガポールそして日本にも伸びていることを知りました）。

イギリスを拠点とする研究者と話をする機会にも恵まれました。私は 2019 年から King's College London の博士課程に進学する予定ですが、その為の面談・打ち合わせも留学中に円滑に進められました。指導教官となる Hye Kyung Lee 教授の研究室を訪れ、30 分ほどの面談を経て博士課程への進学が決まりました。短時間ではありましたが彼女からのコメントは非常に示唆的で、研究の方針を考えるうえで重要なものでした。私自身の勉強不足のせいで、こうした研究者との面談を最大限活用しきれなかったことが反省点であり、次の留学の課題です。

5. まとめと謝辞

ウォリック大学への留学は、相応の苦労もありましたが、学ぶところが多く、実りある経験となりました。この進学が実現できたのは、学部時代の指導教官である後藤春美先生のご助力があってのことですし、現指導教官の中尾まさみ先生には留学中にも手厚いご指導とご助言を頂きました。加えて、濱井祐三子先生をはじめとしたイギリス科の先輩方の経験や助言から刺激を受け、留学に踏みだすことが出来ました。改めてお礼申し上げます。

卒業生の今

「Chawton House Library 滞在」

静岡大学　鈴木実佳　（33 回）

2017 年 7 月から 9 月までの 3 ヶ月間、教員特別研修というのをとり、イギリスで過ごした。1999 年から静岡大学で教えるようになり、月単位で数える期間を海外で過ごす機会を得ることができたのははじめてのことだった。

大学院生時代を過ごした 1990 年代のロンドンとは物価が怖くなるくらい違っていた。あの頃は 1 ポンドご飯だって可能だった。紅茶は 20p で飲めた。それが、珈琲、紅茶の類いをちょっと飲みたいと思ったら、少なくとも 2 ポンドくらいは覚悟ということになっていた！古き良き学生時代を美化する記憶の改竄だと言われたら、あっさり認めても構わないが、大袈裟に言っているとは思っていない。この物価の変動に比べたら、他の変化はたいしたものではないと思える程度だった。料理への熱狂くらいが例外だろうか。昔だったらガーデニング番組が放映されそうな時間に、工夫を凝らした料理番組がはいっていた。フードクリティックを唸らせて（この人たちの高度に専門的なコメント、味覚とそれを言語化する能力に圧倒される）、勝ち残れるかどうか真剣な眼差しで包丁をとり、フライパンをゆするイギリス人の姿、負けて、あるいは勝ち抜いて、号泣する人びとの食べ物に向ける深刻さそのものという態度は、印象的だった。イギリスの料理はまずいと言われていた時代があったのですよ、と昔話をする時代がそこまでやってきているのかもしれない。

図書館の中に入ってしまえば、そこは変らぬ世界である。もちろん、the Panizzi Reading Room は、日々同じような顔ぶれが通う閲覧室から、日々新たに夥しい数の多様な人びとが訪れる Great Court の展示室に変身していて、大英図書館は St Pancras 駅の隣に移動しているので、大きな変化があったことは確かなのだが、静かで落ち着く空間が確保されていることは変らない。与えられた 3 ヶ月の後半は、さらに時間が止まっているかのような場で過ごした。ハンプシャの Chawton House Library である。

(Chawton House Library)

そこは、Jane Austen（1775-1817）の兄 Edward Austen Knight（1768-1852）が父親の親戚(Knight 家）の相続人となって所有したマナーハウスであり、現在は 19 世紀初めまでの女性作家研究センターになっている。マナーハウスは、さまざまな変遷を経てきているが、特に 1995 年頃以来のジェイン・オースティン愛好ブームに乗って世紀の変わり目には興隆したと言っていいのであろう。学者たちの愛着だけでなく、強力な支援者を得ていた。なかでも、アメリカの Cisco Systems の創設者の 1 人である Sandy Lerner（1955－）が 1990 年代に巨額の財を投じ、コレクションを充実させ、マナーハ

ウスの手前にある建物（The Stables）をドリームハウスに改装した。アイランド型のキッチン、ボッシュの食洗機、銅の鍋、広々としたコンサーバトリー。昼食をとっていると、庭にロビンが現れる。反対側に目をやると、隣家との間から馬が尾をゆらしているのが見える。バスルームを備えた個室の羽根布団もいやに高級だった。このドリームハウスには、それ以前は夢見ることもできなかった洗濯室まであった。洗濯機、乾燥機を備えた部屋は 20 畳近くの大きさだっただろうか。洗濯物を外に干しにいきやすいように庭に直結するドアもあるが、その部屋は天窓のついた乾燥室になっている。以前、中村健二先生がケンブリッジで、dryer があると聞いたので乾燥機を探したが、その部屋自体が dryer だったということを話しておられた。その dryer に類したものだったのだと思う。洗濯物を吊す二本の棹にロープがつけられていて、棹を上下させることができ、洗濯物を並べたら、ロープを引いて二本の棹を天井高く（もともと高い天井をもつ部屋である）持ち上げて、乾くまで見上げるところに干しておくことができるのである。

妙に洗濯室が気にいってしまったのであるが、ポイントはロープでも棹でもない。このようなドリームハウスが、研究者たちの使用に供されていたということである。破格の厚遇だった。だが、ひとりひとりが快適に過ごせることはまだポイントではない。

私が滞在したときは、英米の 18 世紀研究者 5 人と共に過ごすことができた。ここでは、似たような関心をもつ研究者コミュニティーに一日中どっぷり浸かっていることができるのである。図書館があいているのは、9.30 から 12.30 と 13.30 から 16.45（なので昼食は the Stables に帰り、コンサーバトリーで食べる）で、9 時 25 分になると列をなして皆で House にむかい、夕方はそれぞれ思い思いに過ごすが、ブラックベリー、リンゴ、梨、ラズベリーを摘んだり、庭で散策という優雅な時間をもつこともできるという幸福。日本にもこのような、研究者が密接なコミュニティをつくり幸福に時を過ごすことができる施設があったらどんなに良いだろう。

ただし夢のような時間は永続しない。運営上の理由で the Stables は銀行に貸し出されることになり、研究者は図書館を使うことはできるが、2017 年 9 月半ば以来、宿泊は自分で手配しなくてはならないことになっている。それでも Chawton House Library 及び庭は、必見であり、訪れ、滞在するに値するところである。

(The Stables)

「シドニー出産・子育て事情」

国際交流基金　小池若雄

（1997 年 3 月修士修了）

「いいですか。夫に求められている役割は、妻の言うことに従うこと。誰も夫の意見や提案など求めてはいません。」

シドニー市の北郊にある病院の一室。出産を間近に控えた夫婦を対象に病院が主催するセミナーの冒頭で、講師役のベテラン助産婦さんが開口一番そう言いました。産前産後の母親はとにかく大変なのだから、議論は不要、夫の仕事はただ従うこと！

私は 1997 年にイギリス科の修士課程を修了後、文化交流を専門に行う外務省所管の独立行政法人である国際交流基金に就職しました。今年 8 歳になる息子は、私が当時赴任していたオーストラリアのシドニーで生まれました。この稿では、国際交流基金の仕事ではなく、現地での出産・育児を通じて経験した個人的な異文化体験についてご紹介したいと思います。

オーストラリアでは、妻の出産には夫はよほどの事情がない限り立ち会うこととされています。出産前には、最初にご紹介したような病院主催の出産・育児に関するセミナーに夫婦で出席することが義務付けられていました。座学あり、演習あり、グループ討論ありの 2 日間のセミナーで、みっちりと心構えを叩き込まれます。出産とは、妻の仕事ではなく、夫婦で一緒に行う共同作業である、ということなのです。

そして出産の当日。妻の手を握り、頑張れ頑張れと声をかけ、「おぎゃあ」という泣き声を聞いて「やった！」と快哉を上げる、というようなシーンを想像していたところ、これが大違い。「立ち会い」というよりは、「下働き」といった方が正確でしょう。「タオルを出して！」「コップに水を入れて！」「ストローささなきゃ飲めないでしょ！」「バスタブにお湯張って！」。次々飛んでくる助産婦さんの指示に従って、夜を徹して働き続け、子供が生まれた時には安心と疲労で病室のソファにぐったりとへたり込みました。まさに共同作業。すべてのプロセスを夫婦で共有するというわけです。

出産後の様子も違いました。病院からは産後 3 日で退院。日本では「床上げ 1 か月」などと言われ、母親も赤ちゃんもしばらくは外の空気に当たらないように気を付けるところですが、オーストラリアでは、体調が許す限り、できるだけ早く外出することを勧められました。このあたりは、欧米人と日本人の基礎体力の差もあるのではないかと感じますが、基本的な考え方として、子供が生まれても、両親はできるだけ自分たちのライフスタイルを変えないようにすることが大切とされていました。もちろん生まれたばかりの子供を第一に考えることは当然です。しかし、子供のために、親が自分の時間を 100％捧げるのではなく、きちんと自分のための時間を確保すること。親自身がストレスを溜めたりしないことで、子育ても順調に進めることができる、という考え方です。子供の毎日のスケジュールは、起床から就寝まできっちり同じ時刻に行うようにサイクルを作り、子供が寝た後は夫婦の時間を持つ。たまにはベビーシッターを頼んで外食に出かけることもよいでしょう。添い寝もせず、はじめから子供は自分のベッドで寝かせます。

親が趣味を継続できるような工夫も様々です。オーストラリアはスポーツ大国。スポーツ用品店に行くと、赤ちゃんを乗せてジョギングに行けるよう、片手で軽く操作できるスポーツタイプのベビーカーや、赤ちゃんをおんぶしてロッククライミングをするための軽量金属フレームまで売られています。赤子を背負ってロッククライミングをする必要があるのかはこの際不問とします。私もオーストラリアに行ってから（柄にもなく）マラソンを始め、時々大会にも参加していたのですが、ベビーカーを押しながら颯爽と走るママさんに追い抜かれると、少しへこみました。

息子が生まれて 1 年ほどで帰国となり、オーストラリアでの育児も終わりとなりました。ごく短期間の経験から一般化することはできないですが、思い返してみると、オーストラリアで出産することを選択してよかったね、という話を時々妻としています。特に心配性の妻には、オーストラリアの大らかさが合っていたようです。日常生活を送るには、大らかさの裏返しであるいい加減さに苛立つことも時折（しばしば？）あったのですが、こと出産に関しては、細かいことを気にしなくていい、あなたがハッピーであれば大丈夫、と大らかに（大雑把に？）担当医から言われたことで、ずいぶん気持ちが楽になりました。

仕事を一時休職して私に同行していた妻は、日本に戻って元の職場に復帰し、子供は日本の保育園に通い始めました。妻は育児のために短時間勤務にしたものの、なかなか勤務時間内で仕事を完結させることも難しく、家でも業務用スマホを操作しながら家事をする悪戦苦闘の毎日です。あのままオーストラリアで暮らしていたら、どんな暮らしになっていたかな、と時々想像したりしています。

今では小学生となった息子は、いつの間にか筋金入りの鉄道オタクに成長していました。生まれた土地であるシドニーに連れて行ったこともありますが、残念ながら、シドニーの鉄道は東京に比べるべくもなく、がっかりした様子でした。次の任地に、彼を満足させるだけの鉄道網があるかどうかが、目下の悩みです。

今年度 10 月 20 日（土）に予定されているホームカミングデーですが、申し訳ありませんが、コモンルームの開室はいたしません。どうぞよろしくお願いいたします。

卒業生の方へ　お礼とお願い

「イギリス科ニューズレター」は現在、紙媒体と電子媒体の 2 種類の方法で皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体にてお送りした方で、電子化にご協力いただける方は、下記卒業生専用アドレス

igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp

まで、送付先アドレスのご連絡をお願い致します。

また、お届けいただいているご連絡先（住所・電話番号・メールアドレス等）に変更などがおありの場合も、上記までご連絡をお願い致します。

2018 年度　イギリス科運営委員

小川浩之（主任）、中尾まさみ（副主任）、

後藤春美（広報委員）、アルヴィ宮本なほ子、

西川杉子

八代憲彦（教務補佐）、

清水領（教務補佐、7 月着任）

紙面作成

小川 穣　（イギリス研究コース 3 年）